

## 第二章 学園の石像

【1】

「えっ？」

「えっじゃなくてさあ、だからね？その石像が中等部敷地内のどこかにあるって話だつてば。」

昼休み。食堂で温かいうどんをすすっていると入間が弁当のエビフライを箸で持ち上げながら言った。

「この学校では食堂と弁当の好きなほうを選べる。好き嫌いの激しい僕はもっぱら食堂の麺類を食すことが多い。」

「学校七不思議！朝の話の続きだよ。チャック事件で中断しちゃっただろ？」

「ぶぶ…その話はやめてよ！またぶり返してくるから！」

僕としては、背中にチャックの話のほうがつぼにはまり正直まだそれを引きずっているところだ。

「でさ、俺らまだ学園内のことよく知らないじゃん。ご飯食べたら時間もあることだし探検してみない？」

「ええ？」

「そうそう。その石像がどこなのか探そうぜ。なんでも夜になるとその石像が歩き出すって話だぜ」

「おいおい、なんだよそれ」

正直そういう話は苦手だ。

「お待ちせー」

そこへ蕎麦とうどんをトレーにのせた岩槻いわつきがやってきた。岩槻いわつき豊。部活は違ちがうがクラスが一緒。

「あれー？今日はデザートないんだ？」

人間が岩槻のトレーを覗き込んで言った。

「うん。ダイエットすることにしたんだ」

そういいながら鏡餅のようなおなかをさすってみせた。ダイエットって…。蕎麦とうどんを二つ食べ、てる時点でもうダイエットじゃないじゃん…！と思ったがそれは口にしなかった。

「でっ歩き出すって何の話？」

岩槻が奥二重の中にある小さな瞳を輝かせた。

「ああ…人間がさ、夜中に歩き出す石像があるから昼休みに学園の敷地内歩いて探さうって言うんだ。」

僕はわざとらしくため息をついて見せた。

「あ！面白そう！」

大きなおなかを乗り出して岩槻は目を大きく見開いて見せた。

「だろっこの学園、あちこちに異様なほど石像が多いだろ。なんでもその歩きだす石像がどれだかわからないようにカモフラージュしてるって話らしいぞ」

「カモフラージュして？」

うどんをすすりながら視線を入間に向けた。

「その石像、昔何かしらの原因で首が取れたらしいんだ。で皆で首を捜したんだけどなぜか見つからない。仕方がないから新しい首を作って付け替えたらしいんだけど、石像は元の首を今も夜になると探して歩いてるんだとさ。」

「ああ……じゃあ首が真新しい石像を探せばいいってこと？」

岩槻が僕と同じくうどんをすすりながら言った。

「そうそう！でね、どうもその石像が中等部敷地内のどこかにあるやつだっていうんだ」

「それ、ソース元はどこ？」

僕は少しその話に引きながらうどんのつゆをすすった。

「え？射川知らないのか？これ桜倉先輩の話だぞ？」

予想外の名前の登場に僕は思わずうどんのつゆをすすりすぎてむせた。

「あはは……知らなかったの？あ、ちなみに言っておくと俺の情報源のほとんど桜倉先輩だから！」

「弦楽部の部長たる？」

食へ終わったうどんのどんぶりと蕎麦のどんぶりを置き換えて、今度は蕎麦をすすりながら岩槻が言った。

「知らなかった。いつ先輩とそんな話したんだよ……」

少しテーブルにこぼしてしまったうどんのつゆを紙ナプキンで拭きながら聞いた。

「だって先輩と帰る方向一緒だからよく電車の中で話してるんだよ。射川はいつも一人で帰っちゃうからさ。」

ああ…そういうことか…。レッスンやなんだかんだで最近二人で帰ることが多かったがその間にそんな会話が行われていたのか…。桜倉先輩がオカルト話ねえ…。あの低い声で怪談話はさすがに怖いかもしれない。

「よし、じゃあ行こうか！」

入間が勢い良く席から立ち上がった。

「え？」

いつものまにか入間も岩槻も食事を食べきっていた。つて…、岩槻はたつた今しがた蕎麦を食べ始めたばかりだと思つたのにすでに完食してどんぶりのなかには白ねぎのカスが一つあるだけだった。食べるのが本当に早い…。

「よし、射川も行くぞ」

僕があつけに取られていると目をキラキラと輝かせた入間と岩槻が振り向くポーズをしていた。

「あ…ちよ…ちよつと待つてよ！」

慌ててトレーを持つと僕も後を追つて席を立った。

中等部校舎の裏庭にはかなりたくさんの木々や葉が生い茂っていてちょっとした雑木林が点在していた。

そもそもこの学園の敷地が広すぎるのだ。幼稚舎から大学までの大半がひとつの広い敷地内にあるのだがやたら木が多いため「森の中の学び舎」というキャッチフレーズがびつたりとマッチしているくらいだ。その敷地内のあるところどころに大学の美術学部あたりが作ったのだろうか白い石像が学園敷地内のあちこちに点在していて中には校舎内に飾ってあるものもある。

道なき道を生い茂った草を掻き分けながら真っ白い制服に汚れがつかないかと気にしながら前進んだとこつでやつと一つ目の石像を発見するに至った。

「首がない石像って鳥だったの？」

ちよつとあきれながら僕は聞いた。真っ白い石膏の鷲が両手の翼を思い切り広げて飛び立とうとしているものがそこにはあった。石像の周りだけは除草がしっかり行われていて、じつは後ろ手のほうに石畳の小さな小道があるのを発見しズボンの汚れを手で払いながら僕は一つため息をついた。

「いやいや……人間とは限らないぞ。ほら、人と思わせといて実は動物つて事も……」

そういいながら人間と岩槻は真剣な表情で鳥の首の辺りを注意深く観察していた。よなよな首を捜す鳥の像ねえ……なんかあまり怖くない。どうせなら人間とかの方が怪談としては面白みがあるよな気が

するが。

「あーこつちにも何かあるよ！」

岩槻が少しはなれた草むらを覗き込み手招きをしている。

「どれどれ？ー！」

入間が嬉しそうにそちらに駆け寄りあとから僕は退屈そうに後を追った。

「なんだ…」

入間のがっかりしたようにつぶやく声が聞こえた。入間に追いつくと肩越しに僕もそれを確認しさがにおかしくなつて笑い声をもらした。

「ふ…なんだよ、それ…。」

一同、がっかりした視線の先にいたのは、真っ白な石膏でできた、蛇の像であつた。さすがに首なし蛇は笑えてくる。

「首なし蛇が夜な夜なよろにまると這つて首探し？おかしくない？」

僕は必死で笑いをこらえながら言った。

「うーん…でも念のため…」

そういいながら入間は草むらに入ると蛇の胴体を注意深く観察し始めた。

「そもそも蛇の首つてどの部分だ？」

入間がつぶやく。入間が懸命に蛇の首を捜している姿にとつとつ我慢できなくなつて思わず爆笑して

しまった。

「もうよさない？ほら予鈴もそろそろ鳴ることだしさ。」

僕はわざとらしく両手を広げて見せた。

「う…ん…仕方がない。じゃあ続きはまた明日だな」

えーまた明日もやるの？！二人の後を歩きながらスポンについた汚れをみて明日はジャージに着替えようかと本気で考えていた。

### 【3】

「えー本当に探したの？！」

放課後、音楽室にて。桜倉先輩が目を丸くして僕たちを見下ろしていた。

「はい。でも鳥とか蛇しか見つからなくて。その石像って、人なんですよね？」

入間は桜倉先輩の顔を真剣に見つめた。

「ふ…あ…ごめん！まさか本当に探すとは思わなかったから！」

桜倉先輩のになまりした顔を見て僕は全てを察し愕然とした。

「ごめんごめん。冗談なんだよ！入間があまりに熱心に聞いてくるから僕、勝手に七不思議の一つを作ったんだよ。いや…制服しまみれになるまで本気で探してくれるなんて本当ごめんごめん。」

あははと笑いながら桜倉先輩は頭二つ分以上小さい入間の頭をなでて見せた。

「えー！作り話だったんですか？！」

入間はとてもし残念そうな表情を作つてから頬を膨らませ桜倉先輩の顔を上目遣いに睨んで見せた。その様子がおかしくて僕は笑いだしそうになるのを必死でこらえた。

「怒らないでつば。お詫ひに帰りにジユースでもおごるからさ！」

「えー！本当ですか？！」

突然表情を明るくして喜ぶ入間。なんて単純なやつ…。

「よし！放課後のジユース目指して演奏頑張るぞー！」

そついながら入間は自分の席にもどつてバイオリンをケースから出し始めた。僕も戻つて準備しようと先輩に一瞥して背を向けたとき先輩がぼそりとおつづやいた。

「まんざらでもないんだけどね。」

「え？」

背中で先輩の低い声が響いた。思わずぞつとしながら先輩の方を振り返る。するといたずらっぽいやつを作つた桜倉先輩が僕を見下ろしたまま早く席に着けと合図するように手を振つていた。先輩なりのジヨークだったのだろうか。

5時を回つたところで僕は個人レッスンを理由に途中で部活の席を外した。本当なら部活動は6時まで行われる。だがレッスンは6時からだ。最後までやつていたら当然間に合わない。

片手がかばんを持ち、もう片方の肩にバイリンケースを引つ掛けて歩いた。日はまだ明るく依然木々のざわめきが心地よさを演出している。帰りは朝来た正門とは間逆の方向から帰る。

学園の敷地が広いことは先ほど話したがそれゆえに最寄り駅が二つある。中等部校舎はその中間あたりにあり、どちらから降りても良いのだが朝は中等部の正門に近い鎌倉駅で降り、帰りは一つ家側に近づいた北鎌倉駅まで歩くことにしている。北鎌倉まではちよつど中等部と大学棟脇の道をいく感じになるのだがこの中等部側の雑木林の中に先ほどの蛇と驚がいるのだ。思い出すだけで顔がにやけてしまう。首なし驚と首なし蛇が夜な夜なニヨロニヨロ、パタパタ……ああ……だめだ。おかしすぎる……！

「わっ！」

視線を少しそらしたところで突然現われたそれに驚き僕は思わず声を上げていた。木々の中から白い人物の石膏の上半身が顔を覗かせていて、それと目が合ってしまったのだ。

びびりつくりした……。雑木林の中から見えるのは悲壮な表情をつくり片方の手には小さな草の束のような物を持ちもう一方にはこん棒を振り上げるような形をして立っている石像であった。と、反対側の雑木林から突然ガサガサとなにかがこちらにやってくる音がし思わず首なし石像の怪談を思い出し背筋を

凍らせ、音のするほうを目で見張った。

次の瞬間、その草むらから出てきたのは、さらさらの金髪に真っ白い肌、グリーンの瞳に眼鏡を掛けた背の高い白人男性であった。

「どうしたの？」

僕が口をぽかんと開けて佇んでいるとその青年はそっと微笑みながら問うた。

「え……あ……えと……」

石像で驚いていたのと予期せぬ白人の突然の登場に状況把握できず僕は動くことができないでいた。やつとの事で口が動く。

「あ……つと……ノー……プロブレム……えと……なんだっけ……」

動揺のあまり頭の回転が鈍く、英単語が出てこない。

「ふふ……日本語で大丈夫だよ。」

その外人は僕を安心させるようにもう一度優しく微笑んで見せた。なんでこんなところに……ああ……そうか、大学の……留学生かなにかだろうか？手には何か難しそうなの分厚い本と小さな細い水筒を持っている。



流暢な発音のいい日本語で話しながら人差し指で僕の背後を指差した。

「それはなに？君、楽器やつてるの？」

僕の肩に引っかけたバイオリンケースを指差した。

「あ、はい。バイオリンです。」

「もしかして弦楽部？」

「そうです。」

会話のやり取りで少しずつ動揺が解けていく。

「僕も高等部まで弦楽部でバイオリン弾いてたんだよ。」

「え、そうだったんですか？！」

どうやらOBらしい。金髪のバイオリニスト……。想像しただけで、なんて絵になるんだろうと惚れ惚れするぐらいこの人の容姿にはバイオリンが似合っている。

「もうすぐで夏の定期演奏会だよ。今年は何をやるの？」

「チャイコフスキーの弦楽セレナーデです」

「いいねえ。僕も聴きに行く予定だよ。演奏頑張つてね。」

「あ、はい。」

ちよつと緊張しつつも笑顔で元気良く返事をしてみせた。じゃあ、と言って駅のほうへ歩き出そうとした

とく

「射川竹人君！」

と突然フルネームを呼ばれ驚いて振り向く。

「校内、バツつけたままだよ」

そういつて自分の胸を指差して見せた。ああ…。ブレザーの胸ポケットにある、校内だけで付けるバツチがついたままである事に気がつく。まだこのシステムに慣れずそのまま電車に乗ってしまったら先輩に注意された事がこれまでも何度かあった。

「有難うございます」

軽く云釈する。

「待って。」

立ち去ろうとする僕をもう一度引き止めるとその人は僕の前までやってきた。

「僕の名前は羽鳥翼。はとりつば。大学で物理学を専攻しているんだ。」

突然の自己紹介にちよとびびっくりした。と言っか…日本名なんだ…。そちらにも少し驚いた。

「駅ならこちの道に行つたほうが近道だよ。」

そういいながら雑木林の中を指した。よくよく見ると石畳の小さな小道が駅の方角に続いている。

「それから、これ」

そういいながら持っていた水筒を僕の手に持たせた。そのとき手と手が触れ合う。なんて冷たい手なん

だろう…。

「あの…？」

「紅茶を淹れるのが趣味だね。良かったら飲んで」

「え…でも…」

「次に会った時にも返してくればいいから。」

次に？この広い学園でまたすぐに会える確立なんてそう高くない気がしたのだが。僕の表情を察したのか羽鳥翼はまた白い笑顔を作って見せた。

「いつもこのぐらいの時間にこの辺を散歩してるから、きつとまた会えるよ。じゃあ、気をつけて。」

そういいながら軽く手を振ると背を向け少し足早に去っていった。僕の次の言葉も待たずに。初対面の人間にいきなり水筒渡してまた会えるよって…なんだか変わった人だなあ…。仕方がなくそれをかばんの中に入れてしまおうと教えられた小道を進んだ。

## 【5】

つかしいなあ…。羽鳥翼から教えられた小道をずいぶん歩くと歩くが一向に出口らしきものが見えずもう十五分ほど林の中を彷徨っている。どこか途中で道を間違えたのか…とにかく早くしないとバイオリンのレッスンに間に合わない。

一度引き返したほうがいいのだろうか……そう思っていたところをやつと先のほうに雑木林の切れ目を見つけた。

やった！小走りして雑木林を抜ける。

……あれ。愕然とため息をついた。雑木林を抜けた先にあつたのは林の出口ではなく石像であつた。石像の周りを木が避けるように植えられていてそこが雑木林の切れ目のように見えたのだ。それにしても大きな石像だ。上半身は人間だが下半身は馬のようだ。半馬人とかいうやつだろうか……。手には弓矢のようなものを持つていて今にも天を射ようとしている。石像の土台には丸い綺麗な寶石のようなものが埋め込んであつた。

紫色の綺麗な石である。昼間見た鷲と蛇の像にはこんな綺麗な石はついていなかったが、何故この像にだけ？あまりにもきらきらと綺麗なつたので思わずそつと石に触れてみた。冷たい……つるつるとしている。なんの変哲もない。たぶんガラス球か、もつと頑丈な素材の何かだろう。と、そこで我に返る……。つて、そんなのどうでもいいんだ！早くしないと……とにかく戻ろう。レッスンに遅れてしまう。くるりときびすを返し、もと来た道を戻ろうとしたとき、急に体が軽くなつたような気がした。え？視界が真っ白になる。な……なんだ？意識が……遠……の……い……て………

「じゃあ、竹人君が部室を出たのは十七時ごろで間違いないんですね？」

黒い手帳をもったスーツ姿の男に確認を求められ横瀬桜倉は再び頷いてみせた。

「はい……全員が射川君が退室したのを見ていました。その後のことは僕にもちよつと……。まさかその後、行方不明になるなんて……」

思わぬ展開に横瀬桜倉の言葉は小さく震えていた。学校の会議室の一角でスーツ姿の刑事の名にそれぞれの関係者が事情聴取を受けているところである。竹人が十七時に音楽室を後にして以来誰一人彼を見かけたものはおらず学園内あちこちにある防犯カメラにも彼の姿は映っていないかった。

帰宅しない息子を心配した親が警察に捜索願を出したのが午前0時。そして一夜が開け、夕方になり部員にその事実が伝えられた。

同じクラスの入間君なんかは朝の時点で知らされていたらしい。しかし依然として竹人は見つかっていない。当時部活の顧問は席をはずしておらず責任者として横瀬桜倉が事情聴取を受けることになった。他にも特に親しかった友人の入間君などが事情聴取に応じその日の竹人の様子や人間関係などを一通り聞かれたという。それにしても……まさか行方不明だなんて……

学園の雑木林を棒を持った捜索隊がついたりしなから少しでも手がかりになるものはないかと探し回っているし警察などとも出動していた。学園中が大騒ぎである。この調子だとそのうち新聞にも出ることになるだろう。一体どこへ行ってしまったんだろう。横瀬桜倉は考える。家出をするような感じの子じゃない人間関係で問題があるようにも見えなかった。性格も明るくよく笑う子で物事に悲観して……な

んてとてもじゃないけれど考えられない。だとすると…やはり何かの事件に巻き込まれたのだろうか  
…。なんでもいい。とにかく無事でいてほしい。そして何事もなかったかのようにひよつこりと姿を現して  
くれたら…。自分はただただ竹人の無事を祈る事しか出来なかった。

